

山々の自然を映像を通し人々に届ける

—生涯現役カメラマン—

東野良さん

長年、NHK のカメラマンとして、チベットのカイラス山やヒマラヤ登山など数々の山岳ドキュメンタリーを手がけ、フリーに転向後も『日本の名峰』の取材に取り組むなど、家庭の TV に『山』と『自然』を送り届け続けていらした東野良さん。この度、宮城の県金華山にて大震災に遭遇し、HAT-J 主催（毎日新聞共催）の東北応援企画『東北の自然と山を語る』で講演していただいたのをきっかけにお話を聞かせてくださいました。

（インタビューと文：長晶子）

◆子ども時代はどんなお子さんでしたか？

—小さい頃は身体の弱い子どもでした。よく熱を出し、母に負われて病院へ行きました。

小学校に入ってから記憶では、外で遊ぶのが好きな子どもでしたね。毎日暗くなるまで遊んでいました。当時は、勉強しろというより、家の手伝いをしろと言われたものです。

学校までは 5km ほどの道のりでしたし、魚や鳥を獲ったり、林の中に隠れ家を作ったり、サッカーなどもやりましたが、自然は当たり前自分の周りに在るものでした。人と対比するものとして意識するようなものではありませんでしたね。自然の中で遊ぶことによって、体も丈夫になっていきました。

中学では、野球、石巻高校では陸上部に打ち込みました。200m ハードルでインターハイに 2 年連続で出場しました。東北大学に進んでも 4 年間陸上部で、400m ハードルをやっていました。

◆どのように山に出会ったのですか？

—大学を卒業して、NHK の報道部門にカメラマンとして入局しました。カメラマンとしての技術は入ってからということで、重要なのは、ニュース性を見る目、報道の目的意識を持つことだとされていました。地方局の報道カメラマンはコメントも自分でつけなければならないこともありました。

東京での採用の後、2 年経って福島支局へ転勤して、病気で 2 ヶ月の入院をしたときのことでした。元旦を病院で向かえ、その時に見た吾妻山が素晴らしく綺麗だったので

す。その時、「山の取材をしてみよう」とひらめいたのです。退院してから、ランニングを再開し、20Kgのブロックを背負子に積んで山を駆けるなど、猛烈なトレーニングを開始しました。今までケガをしたことはありませんし、腰も膝も痛くなかったことが無いのもこの体力があったおかげでしょう。

それから、ニュース取材の合間に山に登り始めたのです。自己流でしたが、「山溪」や「岳人」を読んだり、冬山に入る頃には加藤文太郎の「単独行」なども読んだりして、参考にしました。

◆仕事と山は両立したのですか？

—吾妻山の四季を撮り、ビバルディの「四季」に載せて15分のローカル番組を2本作りました。それが評判よく、山の番組作りに自信を持ちました。福島で5年、その後静岡に転勤しました。

ここでは、南アルプス南部と富士山で、ニュースや番組の取材をしました。樺島から荒川三山、聖岳、赤石岳など、四季を通して登りました。

もちろん、槍ヶ岳・穂高岳など北アルプスにも足を伸ばしました。月の内、3~4日は山に行っていましたね。仕事と山が、しだいに両立するようになって来ました。面白い山岳番組を作ることで、周りに認められるようになったのです。

そして4年後、今度は札幌に転勤です。ここで4年。この頃には家族も増え、子どもが3人になっていました。

北大山スキー部などとの交流もあり、『秘境、日高山脈』という番組で沢に入るために、小樽の赤岩で岩登りのトレーニングもしました。山スキーも北大OBの人たちとのお付き合いの中で経験を積みました。カメラがビデオになったのが北海道時代です。

◆海外でのお仕事も始まったわけですね？

—東京に戻り、「地球大紀行」でアフリカやアイスランドなど、世界各地を回りました。ほとんど辺境ばかりです。そのあと、1984年にチベットのカイラス山を取材する機会がきました。チベット高原での撮影は二ヶ月におよび、川口慧海を読んではいたのですが、実際に取材してみて、チベットやヒマラヤに目を開かされました。

遊牧民の自然のサイクルを利用した生活や、その生活そのものとも言える信仰の実践など、太陽と雨と草だけで生きるという生き方に学ぶところがあると感じました。

Simple is best、電気に頼って生きる、今の日本とは違う世界がありました。

—初めて7000mを経験したのは、91年・92年のナムチャバルワです。高所に強い体質な

のか、高所で苦しんだことはありません。

95年には日大隊のチョモランマに帯同し、このときの隊長が神崎さんでした。96年は長野県の中日合同登山隊でブータンとの国境のチョモラリ（7326m）にチベット側から登頂しましたが、楽勝でしたね（笑）。98年はシルバータートル隊のガッシャブルムⅡに参加し、第2次隊で、悪天のために登頂は逃しましたが、7800mまで登ることができました。田部井淳子さんが一緒でした。

ークーラカンリが見える、5000mを超える世界で一番高い定住村プーヨムツォを取材したこともあります。これは「チベット天上の湖に生きる」という番組になりました。

自分で企画・取材した「星明かりの秘境カラコルム」は良かったですね。写真家藤田弘基さんとOBディレクターと、60才前後の3人だけで、大氷河を遡り、憧れのスノーレイクに入ったのです。75日におよぶ取材でした。遠くにK2が見えるし、星の撮影も含めて、ハイビジョンの2時間番組になりました。

ー話は別ですが、85年の御巢鷹山（JAL墜落事故）では事故直後の山で4泊を過ごしました。耐えられたのは山をやっていたからです。それからNHK内に全国を横断する山岳カメラマンのグループを組織化し、研修と実践を重ねてきました。今年のNHK撮影班のエベレスト登頂は、その積み重ねがあって実現したものだと思います。

◆日本の山で好きなのはどの山域ですか？

ーやはり東北の飯豊連峰ですね。沢をつめて登るとというのが好きです。

61才でフリーになってから「日本の名峰」に関わり、北海道、東北、北アルプスなどを撮影しました。この頃からスチールカメラも一緒に持って行くようになりました。

今回刊行した蔵王の写真集もそうですが、日本の東北の山の奥深い良さを撮って行きたいと思っています。

◆日本の山の自然環境についてはどのようにお考えですか？

ーブームの山に集中しすぎている感があります。人が増えれば、道が荒れて、ロープが張られ景観が損なわれるし、禁止事項も増えてくる。山の環境として良いことはありません。

山の自然は多様だし、山頂だけではない自然の良さを、山に入って感じとって欲しいですね。

今、仙台山想会の会長をやっていますが、うちの会では、わざわざ廃道になりかけて

しまっているようなルートを選んで入ったりしています。

ゴミは確かに少なくなっていると思います。トイレの整備も進んでいますね。ただ、幕営禁止など、保護かもしれないですが、若者たちにテント縦走の体験をもっとしてもらいたい気もします。

ツアー登山の人たちもガイドに連れて行ってもらうだけでなく、もっと自分で山の勉強をしてもらいたいです。

山の自然について知識が広がると、登山の楽しみ方に幅が出ると思います。

- ◆講演の中で、榎有恒さんの「低い山は低い山なりに豊かなるものを備え、高い山は高い山なりに壮麗である」という一文を引用された東野さん。この文章は、ヒマラヤの高峰も東北の低山も、同じように心惹かれるものを秘めており、したがって登山の興味は尽きないことを語っているといえます。

自然の奥深さに触れ、それを映像化するために、生涯現役カメラマンをめざしているという東野さんです。

まさに縦横無尽に山を走るが如く、たくさんの映像が浮かんでくるような、経験をお聞かせいただきありがとうございます。世界の秘境を一回りさせていただいたようなお時間でした。